AIDS UPDATE

No.64　2006.4.28

広島大学病院
エイズ医療対策室
内線5581（輸血部長室）
Internet: www.aids-chushi.or.jp

●HIV 感染妊婦新生児のケア　P. 1
●岡山派遣報告（1）　小児科医師・エイズ医療対策室　石川暢恒　P. 1
●岡山派遣報告（2）　外来南Ⅰ・看護師　小川良子　P. 2
●新メンバーからのごあいさつ（1）　エイズ医療対策室・看護師　後藤文子　P. 3
●新メンバーからのごあいさつ（2）　エイズ医療対策室・情報担当　佐藤文香　P. 4

HIV 感染妊婦新生児のケア 講師派遣について

平成 18 年 3 月 29 日、岡山県の病院より HIV 感染の疑いのある妊婦が出産間近であるとの連絡を受け、急遽当院より 4 名のスタッフが派遣されました。

当院では HIV 感染妊婦の出産を経験しており、その知識と経験をお伝えするのが目的でした。

急な派遣依頼にもかかわらず、以下の４名の方にご協力をいただくことができました。

石川暢恒 Dr　小児科
信實孝洋 Dr　産科
妹尾安子 Ns　手術部看護師
小川良子 Ns　血液内科外来看護師

この中から、医師の立場から石川暢恒先生、看護師の立場から小川良子さんに、報告をいただきました。

岡山派遣報告（1） 「HIV 陽性妊婦さんが出産！？」 小児科・エイズ医療対策室　石川暢恒

臨床医にとって急な呼び出しは別に珍しいことではありません。しかし、その日の連絡は自分にとってあまりに唐突なものでした。

病棟および外来の仕事が一段落しようかという昼過ぎ頃に「今日、これから岡山県へ行ってくれないか？」という指示があったのです。岡山県の０病院に、スクリーニング検査で HIV 陽性の結果が出た妊娠３９週の妊婦さんが入院してきたとのこと。そこで、講義もしくはカンファレンスのような形式で、自分たちの経験を伝えてくるというのが指示の内容でした。

私たちは昨年９月に HIV 感染妊婦さんからの出産を経験しており、その時の具体的な対応策を生かせれば、との思いで慌ただしく広島を発ちました。

夕方には数十人のスタッフの前で講演する機会を与えられ、医師２名（私と産婦人科の信實先生）、看護師２名（手術室の妹尾さんと原内外来の小川さん）がそれぞれの立場で話をさせていただきました。助産師さんも来られれば良かったのですが、

何分急な依頼のため参加できなかったのが心残りです。

事前の準備が全くできなかったため、話の内容は至らないところが多かったと思いますが、0 病院のスタッフには大変前向きな印象を受けました。質疑応答の時間も当を得た質問が多く、私たち自身にも勉強になったと思います。

HIV 感染妊婦さんからの出産には AZT の注射薬およびシロップが必要となりますが、本邦では市販されていないため、厚生労働省の研究班へ連絡して入手しなければなりません。

AZT が届くのが明後日となるため、明後日に帝王切開を予定されていました。もしそれまで分娩が進行してしまったらどうするのか？早めに帝王切開をしてしまった方が良いのではないのか？などの疑問に対しては、確固としたお返事をすることはできませんでした。

結局、どこまでお役に立てたかわかりませんが、とにかく講演（のようなもの）を終わらせて帰広し、事態の経過を見守ることになりました。

しかし、翌日事態は予想外の方向へ展開していました。PCR の結果が出てみると、何と HIV スクリーニングの結果が偽陽性（つまり、本当は感染していない）であることがわかったのです。当然、普通の出産となります。結果としては、確認検査の結果を待って対処して良かったということになりました。

しかし、今回の事例は私たちにも貴重な教訓を残してくれたと思います。すなわち、同じようなケースに遭遇した場合、私たちはどうすれば良いのか？というものです。今回は幸い実際には感染していないケースでしたが、本当に感染していた妊婦さんが急に陣痛発来し、受診される事態というのが起こり得ることを経験しました。今後即応できる体制を構築しておく必要性を強く感じた数日間でした。

岡山派遣報告(2)
「医療者に望むこと」
外来南Ⅰ　小川良子

「３９週の妊婦さんが HIV 感染の疑いがあって、今日岡山の病院を初診受診して今現在大変！」という連絡が朝 11 時頃私のところに入りました。

その病院では HIV 感染患者の出産は初めてで、おまけに今にでも産まれそうな週数で・・・色々準備が大変です。急遽 15 時半ごろ医師 2 名（小児科・産科）・看護師 2 名（外来・手術部）で岡山へ向けて出発しました。HIV 感染妊婦の出産に関して必要な準備や私たちの体験談をお話しすることが目的です。

岡山の病院で 17 時半ごろから講演会がスタートしました。急な会だったにもかかわらず参加者は５０～６０名程いらっしゃいました。私は初めて人前で HIV の講演を行うことと、準備が不十分なことから緊張してとっても声がふるえました。

話題は母子感染のことと、針刺し事故など医療者の感染防御についての質問が多く出ました。緊急入院になった母親への　心理的な援助や家族のケアについての話題や質問はなく、少し不安な気持ちになりました。

これまで HIV 研修のスタッフを何度か務めて感じたことですが、初心者向けの研修会でもっとも出てくる話題は医療者への感染についてです。

「どのような手袋を使用したらいいの？」
「どんな防御が必要？」
「病室内に医療用廃棄物入れの箱は置いてもいいの？」
「血液のついた病衣はどう処理したらいいの？」
「風呂やトイレは一緒でいいの？」

医療者の多くは HBV や HCV にくらべ感染力は圧倒的に低いということを知っているはずだし、ある一定以上の病院ならスタンダードプリコーションって言う言葉も知っているはずなのに、いつまでたっても「HIV＝感染が怖い」というイメージが医療者の方にも残っているようです。

HIV 感染患者は医療者からの差別についても不満を持ってらっしゃる方が多くいます。「〇〇病院で診療拒否された。」「HIV がわかったとたん退院させられた。」など、最初の病院での印象はこれから治療を続ける上で、患者自身が病気ときちんと向き合えるかを大きく左右します。

「HIV 感染患者の受け入れ大丈夫です！」と、いつでもどの病院でも言ってもらえるように、医療者の知識や体制が整うように願っています。

エイズ医療対策室 スタッフ交代のお知らせ

3 月末をもって、エイズ医療対策室の看護師・河部康子さんと情報担当・大江昌恵さんが退職となりました。

大江さんは、情報担当として研修会の企画運営になくてはない存在で、河部さんは当院における HIV 看護の体制作りに尽力し、患者さんたちからも厚い信頼を得ていました。

4 月からは新メンバーを迎えております。また、新たな体制を作り、患者様への支援、そして中四国ブロックの他の病院への研修等を充実させていきたいとスタッフ一同考えております。

新メンバーからのごあいさつ（1） エイズ医療対策室看護師　後藤文子

4 月からエイズ予防財団のリサーチレジデントとしてエイズ医療対策室で働いている後藤です。

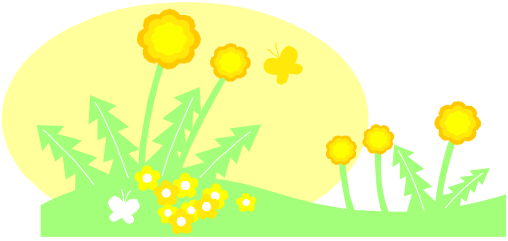
私は看護師を 6 年経験した後、4 年前に佐賀医科大学医学部看護学科に編入し、2 年前に広島大学保健学研究科に入学し、今年の 3 月に修了しました。4 年間も学生をしていたので、毎日仕事に行くのも久しぶりです。

仕事の内容は、HIV の中国・四国ブロック拠点病院の看護師としての活動や当院を受診されている HIV の患者様のケアを行っています。仕事を行っている中で、HIV は薬の進歩によりすぐに死とつながる病気ではなくなったことに伴いケアを行う医療者の役割も変わってきていると感じました。

患者様が感染を告知され心理的な衝撃を受けた時に緩衝を行うためのケアや AIDS 発症によるターミナルケアは HIV 治療薬がなかった頃より行われていたと思われます。

現在はそれに加えて、
「定期的な受診を継続するためのサポート」
「家族やパートナーへ患者さんが感染を告知するためのサポート」
「服薬開始に向けてのケア」
「服薬継続のためのケア」
「日和見感染に対するケア」
なども必要となっていると考えます。

そのため、はじめは私が多岐に渡るケアを提供できるか不安が大きかったのです。しかし、エイズ医療対策室では医療スタッフがチームとして、医師、薬剤師、臨床心理士、社会福祉士、看護師などの多職種が関わっているため、他の専門職者と協力が得やすいことが分かり、最初の不安も緩和されました。今後は、チーム医療の中で HIV の患者様の QOL 向上のために励みたいと考えています。



＜お詫び＞
AIDS UPDATE No.63 に、寄稿いただきました仁井谷善恵さんの所属を「歯科」としておりましたが、正しくは「口腔保健学科 歯科衛生士」です。お詫びして訂正いたします。

新メンバーからのごあいさつ（2）
エイズ医療対策室情報担当　佐藤文香

はじめまして。

今年の 4 月よりエイズ医療対策室で情報担当のリサーチレジデントとしてお世話になることになりました、佐藤文香と申します。ご飯は質より量を取る。流行ものが去った頃に乗ってみる。そんなありふれた２６歳、社会人１年生です。

これまで社会福祉学を勉強してきたこともあり、ゲイ・レズビアン・バイセクシャル・トランスジェンダー等、セクシャルマイノリティーの問題や精神保健分野に興味を持ったことはありましたが、AIDS/HIV の問題に取り組むのは今回が初めてです。

大学病院という特殊な環境に身を置くことで、院内外の様々な医療従事者の方々、またその他の方々とお会いできることをとても楽しみにしています。１つ１つの出会いを大切にしながら、少しずつ自分の見聞を深め、視野を広げることができればと考えています。

今はまだ小さな仕事一つをこなすことにさえ時間がかかり、周囲の人たちに支えられながらの毎日ですが、いずれは個人的に興味のある AIDS/HIV の予防・啓発活動にも携わりたいと思います。これから院内外で仕事をするのにあたって、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

＜ご意見募集＞
ご意見やご希望がありましたら、エイズ医療対策室（5351/5581）までお寄せください。
[TAKATA]
nobotaka@hiroshima-u.ac.jp